

高齢者のヘルスリテラシーを向上する教材開発

－成果物の形成的評価－

三輪眞木子¹⁾、佐藤正恵²⁾、山下ユミ³⁾、磯部ゆき江⁴⁾、阿部由美子¹⁾
放送大学¹⁾、千葉県済生会習志野病院²⁾、京都府立図書館³⁾、二松学舎大学⁴⁾

本研究では、高齢者のヘルスリテラシー向上を促す方策として教材を開発した。ポスター発表では、開発した教材の形成的評価と教育効果検証の方法と結果を述べる。

背景と目的：高齢化が進む日本では、高齢者層の健康管理が重要課題となっており、健康寿命の延長方策が求められている。本研究は、健康・医療情報アクセスにおける年齢によるデジタルデバイドに着目し、医療関係者 10 名のインタビュー調査と高齢者 102 名のアンケート調査を実施したところ、75 歳未満と 75 歳以上に有意差は認められなかった。インターネットで健康医療情報を探す高齢者はヘルスリテラシーレベルが高いこと、女性の方が男性に比べて「情報を理解し人に伝える力」が高い傾向があることが明らかになった。研究成果に基づき高齢者のヘルスリテラシー向上を促す方策として教材を開発し、この教材を用いたインストラクションの効果を測定した。

方法：2021 年度から放送大学が実験的に開始したライブ Web 授業において、開発した教材をテキストとして使用し、2022 年 6 月 3 日～7 月 6 日に 7 コマ（計 630 分）の講義を実施し、7 月 6 日の最後の授業では学生同士のディスカッションによる振り返りを実施させた。学生に任意に受講登録させたため受講者は 21 歳～79 歳（男性 3 名；女性 4 名）と年齢の幅が広く、想定した年齢層（65 歳以上）に限定されなかった。

教材の量的評価では、授業がヘルスリテラシーレベルの向上にどの程度貢献したかを測定するため、伝統的・批判的ヘルスリテラシー（CCHL）尺度による受講前と受講後の受講生のヘルスリテラシーレベル（5 件法）を比較した。また、各回授業の達成度を把握するため、受講生に授業前と授業後に目標達成レベル（5 件法）を、放送大学のリアルタイム評価支援システム（REAS）を使用し、ライブ Web 授業の Moodle サイトから登録させた。受講終了後 3 日以内に教材評価レポートを受講者に提出させ、内容分析を実施した。

結果：ヘルスリテラシーレベルは、全項目で受講前より受講後の方が高かった。従って、開発した教材はヘルスリテラシーレベルの向上に効果があることが示された。

各回の学習目標達成度については、第 2 回のデータが取得できなかったため、第 1 回、第 3 回、第 4 回、第 5 回、第 6 回、第 7 回の授業前と授業後を比較した。一部の項目では天井効果のため受講前と受講後の差が認められなかった。受講生の受講前の数値が高かったため天井効果が生じたものと思われる。質的評価では、学生のレポートの内容分析結果に基づき、必要に応じて教材を加筆・修正した。

結論：開発した教材は年齢に関係なく学生のヘルスリテラシーレベル向上に有効であることが明らかとなった。ただし、サンプルが非常に少ないこと、ライブ Web 授業の性格上インターネットを使いこなせない受講者はいなかったことからさらなる調査が必要である。今後は、公共図書館での実践を予定している。